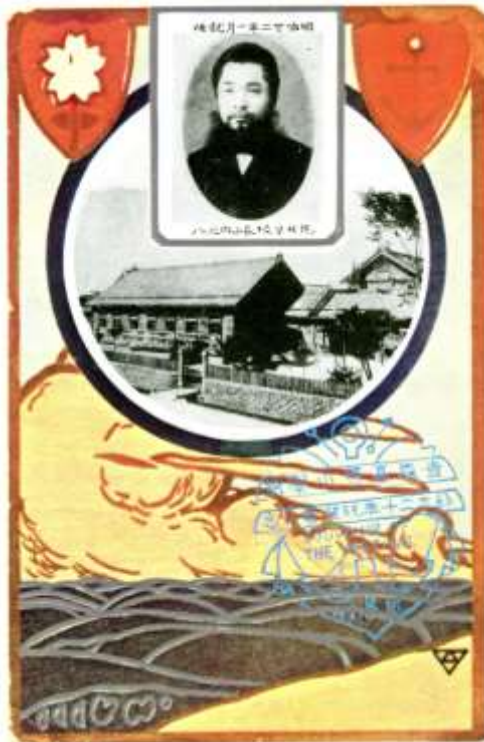


こんにちは！ 室長の工藤です。

「青森はかつて善知鳥村と呼ばれた淋しい漁村であった」というフレーズはご存知だろうと思います。ところが、藩政時代以前の記録には善知鳥村を改めて青森と呼ぶようにした、また善知鳥村は漁村であったと記すものはありません。明治9年(1876)の『新撰陸奥国誌』においては、藩政時代の青森町は、かつての善知鳥村・安方村・蜷貝村・多門天村の4か村で構成されていると理解できるような叙述はあるものの、冒頭のような書き方はしていません。これについて私は、明治41年に刊行の『青森市沿革史』の影響で誕生した歴史叙述であると考えていました。

そんな中、先月から市民図書館でやっております企画展示「むかしの教科書」の準備の段階で、明治29年に刊行の『青森県史談』という本の存在を知りました。残念ながら歴史資料室では所蔵していないので、市民図書館の国会図書館デジタル資料送信サービスを活用して閲覧しました。この本は県内の「高等小学校初学年」の子どもたちの地域学習の教科書で、編者は長く青森県の教育界、さらには卓球など新しいスポーツの導入に尽力した山内元八です。



山内元八

(青森高等小学校創立二十年祝賀会記念絵はがき、  
『目で見える青森の歴史』より)

さて、この本の第二章「各地方の沿革」に「青森町及其の近傍の話」という項目があり、冒頭に「青森は、昔善知鳥村と称する一小漁村なりしが」と記されています。私が知るところでは、これが「青森の旧称は善知鳥村という漁村」の初見です。この叙述は山内の創作か、それとも何か典拠となる史料があったのか…これは謎のままですが。

